

4. 曾々木の漁業

布 川 哲 匡

- I. はじめに
- II. いわし漁
- III. 現在の漁業
- IV. 漁業にまつわる祭礼
- V. おわりに

I. はじめに

輪島市の東端の海岸沿いに位置する曾々木は、板状の岩の真ん中にぽっかり穴のあいた窓岩や、厳寒の荒波が岩場にうちつけられてできる波の花を見ることのできる景勝地として有名である。現在は観光地としてのイメージが強いが、古くは大変漁業の盛んな町であった。本章ではそのような曾々木における聞き取り調査によって得られた資料に基に、曾々木のさまざまな側面のなかでも漁業について検討してみたい。なぜなら人々の生業の中心であった漁業の変化を見ることは、曾々木の社会に生きる人々の生活がどのように変わったのかを教えてくれる重要な要素となるからである。本章の順序としては、まず過去の曾々木の漁業最盛期においてとりわけ大漁であったいわし漁に焦点をあて、当時の人々の生活の様相を考察する。そして現在における曾々木の漁業の様子を概観し、最後に漁業にまつわる祭礼事にはどのようなものがあるのか紹介して、本文のまとめと考察に入る。

II. いわし漁

1. いわし漁全盛期

曾々木は現在でこそ漁師の数は減ってしまったが、1965年（昭和40年）ごろまでは、大変漁業の盛んな町であった。豊富な水産資源に恵まれていた当時の曾々木では特にいわしは非常に大漁で、いわし漁が漁業の中心であり人々の生活の支えとなっていた。

当時の漁師たちがいわしを捕獲するためにおこなっていた漁法は刺し網漁法である。刺し網漁法とは帯状の網を魚の通り道に仕掛け、そこに魚をからませてとる漁法である。網を海中に仕掛けてから引き上げるまでの時間は、時期や漁獲の対象となる魚種によりさまざまであるが、春に曾々木で行われていたいわし漁は夜中に網を仕掛けて、早朝にその仕掛けておいた網を引き上げるという方法をとっていた。網を引き上げ船に大漁旗をかかげて浜辺に戻ってくる漁師を女性たちが迎え、そこから彼女たちは男たちのとってきた膨大な数のいわしを網から外す作業に追われるのである。

網からひとつひとついわしを外していくこの作業には多くの時間がかかった。あまりに長い時間がたってしまうと魚の鮮度が落ちてしまうため、別に女性を雇って作業を手伝ってもらう場合もあった。そのとき雇われた女性の給料は現金ではなく現物支給、つまりいわしを与えられた。いわし漁は男性だけの仕事ではなく、同時に女性の仕事でもあった。海の上では男が船に乗って魚をとり、陸の上では女がせっせと魚を網から外すという男女の役割分担のなかでいわし漁は成立していたのである。

しかしながらおよそ1955年(昭和30年)を境にいわしの漁獲量は大幅に減少し、昭和40年(1965年)ごろまでにはいわしはほとんどとれなくなってしまう。潮の流れの変化によりいわしの回遊が激減したことが、いわしがとれなくなった要因のひとつとされている。いわしがとれなくなっからは、北海道まで漁をしに出かけた人たちもいたという。船で北海道まで行った漁師たちは、現地で家を借りて8月から10月の3ヶ月間漁を行った。帰りの船には自分たちが釣ったイカでつくったスルメや海草を干したものを積んで曾々木に帰った。しかし北海道まで行って帰ってくるのは、当時の船が木製で非常に危険が伴ったため、この漁がおこなわれたのは3、4年の間だけであった。

2. いわし

1955年(昭和30年)ごろまで続いた曾々木のいわし漁が最も盛んであったころ、大量に水揚げされたいわしはさまざまな形で利用され人々の生活を支えた。春に新鮮ないわしの人々の食卓に頻繁に登場したのはいうまでもないが、いわしは北陸の長い冬の間の貴重な食料としても活躍した。人々は脂の乗ったとれたてのいわしの頭をとって、腹を開いて糠漬けをつくっていたのである。このいわしの糠漬けのことを地元の人にはコンカイワシ、あるいはいわしのコンカ漬けと呼んでいる。当時は現代のように冷蔵・冷凍技術はまだ発展しておらず、とれたいわしをそのまま長期保存するのは不可能であった。そこで人々は伝統的にいわしを糠漬けにして非常食、冬のための保存食としていたのである。

また、いわしはただ人々の食料となっただけではない。保存食とは別にいわしを加工してつくられていたものにシメカスというものがある。シメカスとは田畑にまく肥料のことで、大量のいわしを巨大な釜で煮たあとに油をしぼって乾燥させてつくられた。当時の曾々木には田畑はほとん

どなかったため、シメカスは鈴屋、栗倉、広江などの曾々木の周辺の農山村の田畑の肥料として重宝された。いわしの豊漁時代、曾々木にはシメカスをつくるシメカス場なるものが2ヶ所ほどあったという。当時のことを知る人の話によると、春になっていわしがたくさんとれる時期になると、曾々木の浜辺一帯はシメカスをつくる時のにおいでいっぱいになったそうである。

以上ここまで、春の食卓を飾るいわし、冬を乗り切るための貴重な保存食となるいわし、作物の発育を促す肥料となるいわし、などとさまざまに形を変えて人々の生活を支えるいわしについて述べてきたが、さらには財貨を得るための商品としてのいわしもある。大量のいわしがとれる曾々木はいわしの行商を行っていたのである。いわしの行商は主に女性の仕事で、地元の20歳から40歳くらいの者がおこなったという。女性たちはいわしを入れた天秤をかついで曾々木から鈴屋、栗倉、広江などの山の方まで歩いていわしを売りに行った。曾々木の周辺に位置する農山村に住む人を曾々木の人は山の者、反対に山村に住む人は曾々木に住む人のことを海の者と呼んでいたようである。山の者はいわしの代金をお金で支払うよりもいわしと米を物々交換するケースが多かった。また即座に米を支払うことができない場合、山の者は「アキテにしてくれ」といい、いわし代を秋までツケにしておくケースも少なくなかった。アキテは秋米という字をあて、「アキテにしてくれ」とは、秋の米の収穫でいわし代を払わせてくれということである。その際いわしを売る海の者は、帳面にいわし代を記録しておき秋になるまで待つのである。また山の者は魚のさばきかたをあまり知らないこともあり、行商の人に頼んでいわしをさばいてもらうこともあった。

また、一方的に海の方から山の方へ売りに出るだけではなく、反対に山の方から海の方へいわしを買いにくる人もいた。曾々木にいわしを買いに来るとき、山の者はたいていセナガチと呼ばれる背負子のようなものに長桶をのせてやってくる。海の方から山の方へいわしを売りに行く人はほとんどが女性であるが、山の方から海の方へいわしを買いにやってくる人は若い男性が多かった。彼らは購入したいわしをその桶の中に入れて持ち帰った。彼らの中には数名のグループで夜中のうちに曾々木にやってきて、船小屋で寝ながら早朝に行われるいわしの水揚げを待つ人たちもいた。いわしはうま味となるイノシン酸の分解や脂肪の酸化速度がマグロやタイなどに比べて速くて腐りやすいうえに、いわしの入った重い桶をかつぎ歩いて運ぶのは大変時間がかかるため、水揚げ直後のいわしをすぐに運ばなければ魚の鮮度が落ちてしまうからである。

III. 現在の漁業

前節で述べたように、いわしは当時の曾々木の人々の生活の支えとなっていたといえる。そのいわしがほとんどとれなくなったことが、曾々木の漁業に及ぼした影響は深刻なものであったことは

容易に推測できる。この節ではいわしの不漁以降、大きく変化した漁業の現在の様相を述べていく。

現在曾々木の海では漁業組織に属する組合員たちが漁をおこなっている。その漁業組織とは20年ほど前に設立された曾々木定置網漁業組合である。組合員は合計80名くらいで、船を所有している正組合員と船を所有していない準組合員で構成される。正組合員と準組合員の数はそれぞれおよそ40名ずつである。組合員は毎年組合に入漁料を納めなければならず、その金額は正組合員が1万円、準組合員が5千円となっている。曾々木の組合員が漁を行うことのできる漁業範囲は、町野川河口周辺から珠洲と曾々木の堺である垂水の滝辺りまでで、浜からは2kmくらい先の沖までの範囲で漁が可能である。

いわしが大量にとれた時代では、大きな船を持った船首が乗組員を雇って集団で漁に出ていたが、現在は一人乗りか二人乗りくらいの小型の船に乗って個人で漁をおこなうのが一般的である。このように集団でおこなう大規模な漁から個人でおこなう漁に変化した要因としては、漁業では採算がとれない、会社勤めをするほうが収入がよい、大型漁船が曾々木の沖合いで大量の魚をとっていくから曾々木でとれる魚が全体的に減ったなどの理由で漁業人口が大幅に減少したこと、また後継者がいないため現在漁をおこなっている人のほとんどが高齢者であることなどがあげられる。実際のところ、漁業だけで生計を立てることができず曾々木の漁師はほとんどおらず、年金を頼りに生活している人も少なくない。また、曾々木に近い時国にある田んぼで農業をしながら小船に乗って漁をする人もいたという。寒さが厳しく波の荒い冬の間、漁師たちは船を出さず、網の修繕作業をしたり、岩場で海苔や海草をとるなどする。海苔を刻んで枠に入れ干しあげたものはオシキノリと呼ばれている。

曾々木の漁師たちは基本的には個人で漁をするのだが、一部の組合員たちは大型の船に集団で乗っておこなう漁もある。それが定置網漁である。定置網漁とは、海面に網を設置し回遊する魚を網の中に誘導し、先端の袋のような網で魚を捕らえる漁法である。曾々木の定置網漁を行う組合員は8、9人ほどで、年齢は50代半ばから70代の人で占められている。定置網漁を行うには県からの許可を得なければならず、2年間以上漁を行わない期間が続くとその県から認可された定置網漁業権は失効してしまう。定置網漁は一年中行うことができるわけではなく、定置網漁を行ってもよいのは3月から10月までの間と規定されている。定置網によって獲れた魚は船で輪島の港まで運ばれそこで売られる。

また、漁をすることができる期間が定められているのは定置網漁だけではなく、サザエの刺し網漁も決まった時期にしかすることができない。サザエは基本的にはいつでも捕っていいのだが、サザエを刺し網でとることができるのは6月から8月にかけてのある一定期間に定められている。近年はサザエの数が減少傾向にあるため、曾々木では漁業組合が輪島の港からまとめて購入したサザエの稚貝を海に放流する活動が行われている。

IV. 漁業にまつわる祭礼

曾々木は古くから漁業の大変盛んな漁師町であったことはここまで述べてきた。ならばそこで催される祭礼行事も漁業や漁師に関連したものが行われてきたと考えるのは自然なことであり、現に祭礼は催されている。この節では現在もなおおこなわれている漁師の祭礼、および漁師たちに変化ゆかりのある地である岩倉寺にまつわる話を、簡単に紹介したいと思う。

1. 恵比寿祭

曾々木の年中行事のひとつに恵比寿祭というものがある。豊漁・航海の神とされている恵比寿を祭る恵比寿祭りは、古くから曾々木の漁師たちにとって重要な祭礼事である。恵比寿祭りは毎年2月10日に地元では恵比寿神社と呼ばれている春日神社の付近にある恵比寿堂で行われる。恵比寿祭には毎年曾々木全体の7割ほどの人が参加し、漁師だけが参加するわけではない。漁業組合の方から聞いた話によると、祭は午後2時から始まり神主が参加者全体に祝詞（のりと）をあげる。この一回目の祝詞が終わったあとに、漁業組合の正組合員の者は持参してきた札に個別に祝詞をあげてもらう。正組合員の者はこの祝詞をあげてもらった札を、海上安全を願って自分の所有する船にそれぞれとりつける。祝詞をあげるのを終えたあとは「大漁日」を決める儀式へと移る。組合員の方が考えるに、この大漁日を決める儀式は曾々木のいわし漁全盛時代からの名残で、大漁日に当たった日はきっと魚がたくさんとれるという希望を得る目的で行われる願掛けの儀礼のようなものであるという。大漁日となるのは5月中の10日間と6月中の10日間の合計20日間である。和紙を手でちぎって5月1日から5月31日、および6月1日から6月30日までの日付を書いて、三方（さんぽ）と呼ばれる器に月別に分けてのせる。神主が榊を手に取りその三方にのせられた紙片に近づけると、そのうちの何枚かが榊にくっついてくる。そして榊にくっついた紙片に記されている日付がそのままその月の大漁日となるのである。大漁日を決めたあとは宴会が始まり、魚介を使った鍋や刺身がふるまわれる。たいていは午後5時頃にもなると宴会も終わり恵比寿祭は終了とするという。

2. 起舟祭

恵比寿祭の翌日、2月11日には起舟祭が行われる。起舟祭は船持ちの漁師が雇い入れた乗組員たちを自宅に招いて催される行事である。冬が終わってその年の春から始まる漁に出る前の船首と乗組員たちの顔合わせをして宴会がおこなわれる。現在は漁師の数が減り、漁業形態が集団でおこなう漁から個人でおこなう漁に変わったこともあり起舟祭は大きく簡略化された。漁業が盛んであった当時を知る方の話によると、神主を自宅に招いて大漁旗にむかっておはらいをしてもらっていたという。船の船首部分に榊をくくりつけ、船にお神酒を供えることは昔からの名残で現在でもおこ

なわれているようである。

3. 岩倉寺

曾々木海岸の背後には古くから漁師とゆかりのある地として標高は 357 メートルの岩倉山がそびえたっている。岩倉山のその急な坂道を登った山の中腹には真言宗岩倉寺があり、本尊は高さ約 60 センチで黄金色をした千手観音である。この千手観音像には次のような言い伝えが残っている。その昔、現在の輪島市光浦の漁師、新左衛門が夜の海で明るく光を放つ木を見つけた。拾い上げて家に持ち帰ったところ、霊夢があり、木を切り開いてみると中から千手観音像が出てきたのである。その後、観音様が夢枕に立ち、東の方へ持っていくようにお告げがあった。新左衛門が観音像を持って出かけてみると、曾々木のあたりで急に重くなった。こうして岩倉寺に安置されたという。

この漁師によって海から拾い上げられたという伝説もあり、岩倉寺は昔から現在に至るまで多くの漁師の信仰をよせる寺である。岩倉寺には曾々木の漁師のみならず奥能登に住む人々、ひいては沖を船で行きかい漁をする地方の漁師たちもお参りにやってくる。岩倉寺を参拝に訪れる漁師たちは自分が漁に出てとってきた魚をお供えする。漁業組合の方の話によると、大漁祈願と海上安全の御利益を願って、その年の一番最初の漁でとれた魚をお供えものとして岩倉寺に祈願にやってくる漁師は特に多いという。

V. おわりに

本章ではここまで漁業という視点から曾々木の人々の生活の過去と現在をとらえようと試みてきた。今回の調査ではさまざまな人々に漁業の話をうかがったが、昔はいわしが本当にたくさんとれたという話は、話を聞かせてくれた人たちのほとんどから聞かれた。いわしはそれほどにも人々の生活に密着した大変豊富な産物であったことがうかがえる。話のなかでも、曾々木はいわしを付近の農山村に提供するかわりに米をもらい、反対に農山村は米を提供するかわりにいわしをもらうという相互に扶助する関係が築かれていた話は印象深い。ともすればこの相互扶助のつながりの一端を担っていたいわしがとれなくなったことは、曾々木のみならず曾々木の周辺集落にも少なからず影響を与えたように思われる。この点に関してはより詳細な考察がなされるべきであったが、いわしが不漁となってからの曾々木とその周辺地域との関係の変化についての情報が聞き取り不足であり十分な考察ができず、反省している。